

# ヴォイス ～森の声～

2号 vol.2-1 2008/05/10

中・高校生☆協同編集による

クリティカル・カルチャー・マガジン



## 1部：特集

★「行事を  
考える」

3p

★「憲法」

9p

Guests

板垣敬子・押立 敏  
樹

木又 楽・斉藤知也

菅間正道・中島水樹

早川 誠

## 2部：「ここに面白い世界がある。」

写真展 1p ☆建築家と数学 18p ☆ツツのツツ 19p ☆西表島 21p

音 23p ☆木が叫ぶ 25p ☆放課後も食堂あいてるよ 26p

なにしよう、なにができる 27p ☆他者と交わる 28p

# JPS 写真展



上の写真は JPS 写真展（日本写真家協会）に出した写真です。

この写真は高1の学年ワークで「職人と出会う」というコースで最後に行った豊屋さんで撮った写真です。

まさか、これが入選するとは思ってもみなかった。。。

僕は基本的に風景の写真を主に撮っている。最初はケータイのカメラでとっていてこのきれいな景色を誰かに伝えたい。という訳でもなく、ただ自分が、きれいだ、と思った絵を撮っていただけだったと思う。そのうちそのケータイで撮った写真を友達にあげるようになった。そこで、友達の反応がよかったからもあるのか、きれいだなと思った風景を撮って人に見せるようになった。

その時はただ何も考えず綺麗な風景を撮ってみせていただけだった。そのうち「プロで写真を撮っていきいたい」と思い、この JPS 写真展に写真を出してみたのだが、結果、入選。

入選したからにはこの道を進んでいこうと思った。だが、このまま何も考えないで撮っているだけではいい写真は撮れないと思い、改めて自分の写真で何を伝えればいいのか。自分は何を写真で伝えたいのかというのを考えた。きれいな風景といってもいろいろあると思う。

力強い風景、流れるような風景、神秘的な風景。

僕が考えた結果、自然の力強さと、その裏で人間がその力強さを壊している。そんな裏表、どちらも伝えていきたいと思った。

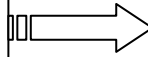
まだまだ先は長いから変わってしまうかもしれないが、当分はこれで行こうと思っている。



モザイク写真展  
風景の詩  
自由の森学園二階図書館前

2008.5.7~5.16

## 1部：特集①「行事を考える」



# 年間日程のこと

2008年1月、教員から生徒にむけて、来年度の「9月に割り当てられる行事を年間日程から外す」という提案が出されました。そして、そのことについて生徒にも話し合ってもらいたい、と。その理由として言われたのが、「①一年間を見渡して、行事の数が多すぎるためにそのつど授業が途切れてしまい、学びのリズムが生まれにくい。②前期終了まで実質的な授業数が大幅に削られ、学びのまとめへの流れがつくられにくい。」ということです。

しかし、1、2月とたくさんの行事が重なって忙しかったため、生徒は話し合いをもつことがあまり出来ませんでした。

そうこうしているうちに、2008年2月26日(火)、高校のクラスに教員から一枚のプリントが配られました。上記に加えて、「教職員会議ではそれらを解決していくための手だてとしてやはり、三大大行事(体育祭、学園祭、音楽祭)のうちの一つの行事をやらないようにする」以外ないのではないかと書かれていました。学年集会やクラス、9月の行事を考える会(生徒発足)などで生徒や教員が2008年4月の末まで話し合いを続けましたが、結論には至らず、三大大行事の日程が白紙になった2008年度年間日程表が教員によって出されました。



今、体育祭が5月24日(土)の本番にむけて動きだしていて、9月の行事日程について話し合う時間が生徒にはありません。しかし、このこと(学校についてのこと)は生徒も教員も保護者も、一人一人が考え、時間をかけて、みんなが協力して変えていかなくてはならないことなので、これからも話し合いの場をつくっていかねばいけないと思っています。

神座 想(高3)

# 学校を創れていますか？

## ～9月の行事日程から考えたこと～

9月に行事を入れないという事が教職員会議で決定された。つまり、学園祭がなくなるかもしれない。私は初めてそれを聞いたとき「なんで勝手に教員だけで決めてしまうんだ」と思った。生徒に相談もなしに勝手に…と教員を責めた。

でも9月の行事日程の話し合いに出たり、いろいろ考えたりしていく中で、その考え自体が教員任せだったのだと思うようになった。

“生徒主体性の学校” “なんでも一から生徒が創り上げる” そんな言葉をよく聞くけれど、今の自森は本当にそうなのだろうか。私達は自森を“創る”事ができているのだろうか。「9月の行事をなくす」という大事な事が教員側から提案、そして決定されたということは、生徒の力が弱まっているという事ではないかと私は思う。「教員が相談もなく勝手に決めてしまった」最初にそう思ったけれど、それは「相談も出来ない程、生徒に力がない」という事なのではないだろうか。去年の学園祭では係員が足りなくて教員が仕事をしていた係があったり…本来なら生徒がやるべきことも教員にやらせてしまう程、生徒に余裕がない。

また、教員と生徒で相談ができるような“場”もない。このまま日程の調整や今の自森への問題提議を教員に任せたままで「学校を創っている」と言えるのだろうか？私達は“おいしいところ取り”になっていないだろうか？ 私は、生徒も今の自森の問題などについて考えて、話して学校を創っていきたい。答えの見えない苦しい事もあるかもしれない。でもそこから学校を創っていきたい。そのために、生徒と教員が話し合える“場”が必要なのではないかと思う。そして教員にも生徒にも声をあげてほしい。

板垣 敬子（高1）



## 9月についてあれこれ

…このままだと、今年度の9月には行事ができない、つまり、おそらく学園祭ができなくなります。昨年度の1月ごろ、そんな話が教員たちから

一方的に決定されました。その背景には、自己評価表の記入期間に生徒が忙しくなりすぎると、行事が生徒を中心に自発的に作られていないんじゃないかっていう問題があったわけです。そのことについてはもうみんな大分知っているだろうって思います。でも、だからと言って、生徒が作りたいて言っている行事を教員達が一方的になくしてしまうのは？どうも自森らしくない動きだって思います。

教員達の提示している問題は確かに重要だとは思いますが、大事なのはそう言ったことを最初から生徒と話し合っって生徒達自身にその問題意識を作ることじゃないかって思います。その方が9月の行事を削って半強制的に生徒達の意識を学びの方向へ向けようとするよりも意味のあるものになると思います。



最近の教員の態度はどうも生徒達とは腹を割って話そうって雰囲気ではないように感じ取れます。僕の中では自森ってやっぱり生徒と教員の両方で形を作っていくものだって思っています。だから、体育祭が一段落したら、話し合いの場を作ろうと思っています。生徒も教員も、その場で本音で話し合ってくれませんか??

早川 誠 (高3)

## 教職員会議でぼくが考えたこと

すべての言葉は言い足りないか、それとも言い過ぎるかのどちらかだ。授業でもホームルームでも会議でも、大事なことになるほど、僕の語る言葉は陰翳に乏しくなったり、走りすぎたりすると思っている。それでも「話し言葉」は口ごもったり、言い直したりすることがその場で可能だけれど、「書き言葉」にそれを内在させることはとってもし難しい。(もっとも、「日本語」の授業ではその難問に挑戦するのだけれど。)

「年間日程と行事について、考えていることを書いてほしい」と生徒から頼まれたときにも、実はその思いが最初にちらっと頭をよぎった。けれど、「書かない」ということも、こういう局面では一種の表現になってしまう。それよりは、たとえ過不足があっても、「書く」ということを選ぼうと思う。頼まれた瞬間そこまで考えたわけではないけれど、そういう思いが奥底にあったから、僕はずっと引き受けた。意見の違いを超えて、「根っこの思い」のところで、より多くの人と分かり合えたらと願っている。

「枠」を意識すること……これが、年間日程をめぐる議論のなかで、僕が努めて自分に持たせようとしている観点である。

私たちの生はいつも「枠」のなかにある。例えば人生は出生から寿命という時間の「枠」と共にある。けれど、このことを意識するのは難しい。僕は未だに自分の生に「終わり」があるという感覚をうまく持つことができない。別の事柄で、もう少し身近に引きつけてみよう。自由の森学園高校に入学した人は卒業するまで、「三年」という時間の「枠」を持つ。その意識は入学したばかりの時にはなかなか持てないものだが、卒業が近づくにつれて、リアルになってくると聞く。他にも、僕と生徒と一緒に作るものとして「日本語」の授業があるけれど、授業にも年間およそ四十回しかできないという「枠」がある。

授業のことで考えてみれば、年間四十回という「枠」を意識して、その「枠」をどのように生かせるかと、「授業の年間計画」を一応立てる。どのような順番で、どのように時間を配分したら、より充実した時間になるかな、と予想してみる。その上で一回「九十分」という「枠」をどう「つくれるか」ということが、僕にも生徒にも問われる。授業は「生きているもの」だから、予想通り運んでいかないし、むしろ予想を超えたところにおもしろさもある。けれど、「枠」を意識しているからこそ、すれすれのところで「枠」が持つ限界性に挑んでいくこともできるのである。



それはちょうど、相撲とりが土俵を意識しているからこそ、土俵際でのさまざまな劇（ドラマ）が生まれることに似ている。

例が長くなってしまったけれど、過去十数年「年間日程を考える」とき、この「枠」の意識を私自身が十分には持てていなかったと感じている。だから今回は自分に課している。

授業で深く学んだり、課題やレポートについて教師と話すこと・評価表で自分の学びと向き合うこと・一つひとつの行事を人間関係を紡ぎながらつくりあげること・進路や生き方について調べたり考えたりすること・他者や教師と学校のあり方について話し合うこと……全て大切でおもしろくなる可能性を秘めている。だからこそ一つひとつ丁寧にその「時間」をつくっていかねばならない。（それから何も「予定」のないばかりと空いた時間もとても必要だと思う。なぜなら「生きる」というのは良くも悪くも予定外のことが起きるとのことだし、自由の森の時間には尚更そういう「すきま」も大事だと思うからだ。）これらは相互に繋がっているから、同時並行的に行われることが多少はあってもいい。けれども余りにも多くのことが重なってしまえば、一人ひとりが自分自身と向き合う時間はとれないし、他者と対話する場もつけれない。例えば、評価表を書くためには自分自身と対話する静かな時間と空間が求められるだろうし、行事を丁寧に作りあげていくためには多くの人々が自分をひらいて他者と対話する時間と場が必要になる。



授業のレポートや評価表を綴る時間に「行事をつくる」ことが重なったり、二つ・三つの行事や修学旅行が同時並行的に準備せざるを得ない日程が過去に出されてきた。一人ひとりがあわただしくなって気持ちの余裕を失いがちになったり、一つの行事やイベントについてじっくり考える場に人が集まらなくなったりすることは、「年間日程問題」とも繋がっていると僕は考える。生徒や教師の「気持ちや動機が大切なのだ」という意見にも納得できる場所はあるけれど、一方で、みんなそれぞれの場で結構一生懸命やっているようにも感じている。さらに言えば、行事の準備などにあまり「乗り気でない」人とも一緒に何かの場をつくろうとすれば、「気持ちや動機」を生み出していくためにも、ゆったりとした対話の時間は、さらに必要になると思う。自由の森学園の生徒や教師が「なまけている」とは、僕にはあまり感じられないのだ。それよりも「構造的な問題」を強く感じる。構造的な問題を問うことは「パ



ソドラの箱」を開けてしまうようなことだったかもしれないけれど、教師という位置から見えることもあるし、向きあわなければいけないこともある。それを避けて通ることは自分自身の気持ちとしては、すでにできなくなっていた。

9月の学園祭の一日目、みんなが帰ってからしんとした校舎のなかを、有志の展示発表を見て回る時間が好きだ。昼間の慌ただしさのなかではとうてい見きれないから、夜に観て回っていた。展示されている多くの表現、それも「いま」しか表現され得ないような作品を観るにつけ、惰性に流されがちな僕は刺激を受けていた。展示発表を見て回る時間は、僕にとって貴重な時間だ。

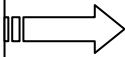


後夜祭のねぶたにも、僕にはとうてい考えつかないようなその発想の豊かさにいつも驚かされていた。例えば「9月に入っている年間行事をはずす」ということが、その学園祭の時間を無くすことに行き着きやすいということは、自覚している。けれどそのデメリットがあったとしても、現在の「込み入った年間日程」を少しでもゆとりのあるものにしたいという思いの方が、やや強かった。「ゆとり」とは楽をするためのものではない。評価表や授業にじっくりと取り組み、自分自身と対話し、そして一つひとつの行事も含めた日々の生活を充実したものにするための時間の創出である。そして何よりも、教師と生徒・生徒同士が学校生活や進路のことなどについて、落ち着いて話ができるための時間を創出するためのものである。だからもしかしたら、それを「すきま」と名付けるべきものかもしれない。その上で、これまで学園祭で行われていた「展示発表」の可能性を、「学園祭というかたち」ではなくても、どこかで生かすことはできないだろうかと探りたい気持ちもある。

職員会議の議論に参加し、決定に関わったときの自分自身のスタンスを振り返ってみた。だからここに書いたこと全てが、職員会議で共有されているということではないと思う。けれども、職員会議の議論の核心部分からはそれていかないように書いたつもりだ。

長くなってしまいました。最後まで読んでくれて、ほんとうにありがとうございました。

齋藤 知也（日本語科）



## 九条世界会議へ参加して

5月4日日曜日。9条世界会議の会場へ行きました。会場の入り口には、長蛇の列が延々とどこまでも続いていました。あとで聞いたはなしは、3000人の人が会場にはいれず帰ったそうです。

僕たちはちょうどぎりぎりセーフの最後尾！僕たちの、すぐ後ろからは入れませんでした。本当に危なかった・・・自由の森学園の保護者、教員のいろんな人がいれなかったと言っていました。僕達は二階の最前列に腰掛けて見ました。いすじゃなくて、階段みたいなところに座っていました。ものすごい人の数でした。



### 第一部

「9条」というフレーズでこれだけの人が集まるなんて。第一部の司会、古今亭菊千代さんは涙がこぼれた、と言っていました。う～ん、凄いよなあ、これだけの人が9条のために幕張メッセに集まるのか。吉岡達也という人が熱く開会の言葉を喋っていました。ピースボートの関係の人だとパンフレットには書いてありました。とにかく熱く、平和への一歩だと語ってくれました。アニファ・メズーイさんは都合のため来ていませんでした。

そして基調講演にうつりました。マグワイアさんと、ワイスさんがスピーチ！

マイレッド・コリガン・マグワイアさんは、北アイルランドの方。コーラ・ワイスさんはアメリカの方です。マグワイアさんの喋った内容の中では、日本の再軍備化への懸念、アメリカ政府の方針への反対。それとか、北アイルランドでの実践のこと等が印象に残りました。

ワイスさんは笑いを巻き起こす喋りでした。でも中身はいたって真面目。コスタリカの若者達が着るTシャツには、「空軍は鳥で充分、陸軍はアリで充分、海軍はサカナで充分」というのがあるそうです。「武器では、温暖化も、貧困も、病気も、無学も倒せない。武器で貧困は倒せない。むしろそういうものを増長させる」とも言っていました。そうだよなあ。